

休日・夜間業務における検体搬送ラインシステムの導入効果

業務負担の軽減・TATの短縮

◎伊藤 彰吾¹⁾、後藤 慎一¹⁾、西尾 淳¹⁾、大脇 源太郎¹⁾、吉崎 まゆ¹⁾、衛藤 麻理子¹⁾、安田 純香¹⁾、若林 弥生¹⁾
春日井市民病院¹⁾

【背景】当院では2021年1月より、業務負担の軽減や検体の受付から検査結果報告までに要する時間（TAT）の短縮などを目的として、検体搬送ラインシステムIDS-CLAS X-1を導入した。今回我々は、休日・夜間業務における搬送ライン導入の効果を、担当職員による意識調査およびTATの変化と共に報告する。

【方法】休日・夜勤担当者22名を対象に、搬送ライン導入前後で運用が変更された点についての意識調査を行い集計した。また搬送ライン導入前後のTATの比較も行った。

【構成】検体搬送ラインシステム（IDS-CLAS X-1）、生化学分析装置（LABOSPECT008α）2台、免疫分析装置（Alinity）2台

【結果と運用】①業務の効率化：以前は生化学と免疫の両方の依頼があった場合、検体をAlinityに投入した後、LABOSPECTにませ換える必要があった。しかし、搬送ラインの導入によりこの手間が軽減され、人の動線が短くなった。また検体投入後の開栓、収納の際の閉栓・搬出が自動化された。意識調査では、ませ換えの手間が軽減され、

動線が短くなったと回答したのは77%、検体収納時の手間が軽減されたと回答したのは95%となった。②TAT短縮：搬送ライン導入前後でTATを比較したところ、全体平均で約6分短縮されたが、休日・夜勤帯においては変化が見られなかった。そのためTAT短縮を実感できたと回答したのは43%にとどまった。③検体の探索：以前は受付番号順に検体を並べていたが、搬送ライン導入後は搬出ラックに収納した順に検体が並んでいる。そのため検体を探索する際、検査システムにてラック位置を確認する必要がある。この方法が以前より手間であると回答したのは43%であった。

【考察】搬送ラインの導入により検体の投入後の開栓、閉栓、収納および検体の各分析機へのませ換えが自動化され、人の動線が短縮されたことで業務負担が軽減された。また、休日・夜勤帯においてはTATの変化がなかったものの、平日日勤帯においてはTATが短縮された。今後の課題として、検体探索の方法を少ないステップで分かりやすく表示するために、システム面を改善していく必要がある。
連絡先：0568-57-0057（内線2213）